

沖

5
2018

俳句雑誌【おき】



木橋の普請

能村 研三

葛飾・鳩の句

榛の木を水面に映し残り鴨

鼻にくる辛子やバレンタインデー

春聯の読めずもわかる恋の詩句

朴の芽の筆穂を天に突き立てて

俳人協会の「花と緑の吟行会」で「葛飾を詠んだ俳人」という演題で講演をすることになったので、あらためて葛飾とその枕詞の鳩について調べてみた。

万葉集の東歌で葛飾を詠んだ次のような歌がある。

鳩鳥の葛飾早稲を饗すとも

その愛しきを外に立てめやも

(作者未詳卷十四相聞)

葛飾とは葛の葉の生い茂ったところといわれ、現在の江戸川を中にして、東西に大きく広がった地域が下総国葛飾郡と呼ばれた。

この歌は「いかに新嘗の夜とはいえ、あの愛しい人を戸外に立たせておかれましようか」と、愛しあう農民の恋の姿が歌われている。

鳩鳥はカイツブリのことで、巧みに水に潜って魚を捕えるところからカヅク(潜く)意で、カヅシカにかかる枕詞となった。

黒塀の裏に消えたる春シヨール

先師登四郎にも、葛飾・塀を詠んだ句が多い。「葛飾」の句としては、

ななくさのはこへのみ萌え葛飾野

葛飾は黒松ばかり初明り

葛飾は霜に芦伏す初景色

朧夜の道違へれば旅に似て

などの句で、正月の季語で詠んだ

句が多く、新年を迎え新たな気持ちになった時、東京生まれの江戸っ子を自負した先師も、半生を過ごした葛飾の地に対しての愛おしさが募ったからなのだろう。

「塀」の句は、

真ん中に木橋の普請青き踏む

両色にて塀すこしづつ動く

遠野火のとほき煽り塀ちらす

芦刈りを見に来し塀の芦まみれ

屋根替の萱のひかりを横抱きに

など、全句集を調べてみると五十句を越えるほどの句がある。

先師登四郎は当初は庵号を「葛飾の書屋」と言っていたが、「杜野の沖」の時代から「塀亭書屋」と言うようになった。

完璧にガラス磨かれ春灯

種案山子

森岡 正作

ひらく書の

今年の桜は早い。わが家の裏の畑との境界に桜の木が四本ある。どれも大木で花が散ると畑が一面に白くなってしまう。今は七分咲き程度だが、満開になってしまうと、どうしても散るということが心に先立ってしまうので、今が一番の見ごろかも知れない。

以前高校に勤めていた頃は、入学式前後に桜が満開になったもので、校門の桜を背景にクラス写真を撮るのが普通であり、登四郎先生の「ひらく書の第一課さくら濃かりけり」という句が思い出されるのも自然のことであった。先生は御自宅の側の真間川沿いの桜を見ながら、近くの市川学園に通われたのであり、授業で開く教科書の新鮮な活字の匂いも、桜の香のように感じられたのであろう。教師にも生徒にも新学期の高ぶりが感じられる句である。

春昼の華のやうなる海鮮井
嘴乾く間もなく潜く春の鴨
朽ち船に残る船霊鳥帰る
春の夢風狂人に名を連ね
私につられて裏の山笑ふ
鹿尾菜刈る始終を波に騒がれて
ひもすがら海を見てゐる種案山子

蒼茫集



野水仙

大川ゆかり

料峭

大畑善昭

見えぬまま月蝕進む寒さかな
春近しスフレまどかに膨らんで

八十一年前の産声枇杷の花
春荒れの荒れまくりたる一日あり

* 折り鶴の角度に折れて野水仙
完璧な夫のスキップ下萌ゆる
壺焼や湯呑みに酒を勧められ
朧夜の湯に振り洗ふ熊野筆

* 料峭や木々は己れの色を増し
金子兜太は梟将たりき春を逝く
ぶらんこや姉が弟の背を押し
建替へのビルの内装木の芽風

刺繍糸

栗原公子

春炬燵

広渡敬雄

* 梅真白この上なにを捨つるべき
行き先は決めず春ゆゑ独りゆゑ
碑の裏に明治とありぬ百千鳥
初蝶来開封に胸をどらせて
シヤガールの空まで飛ばそシヤボン玉
春光や縵りて艶ます刺繍糸

如月や液に浸けおく銅版画
シリウスの光まつすぐ獵果つ
雛飾る夫婦喧嘩の後の妻
左官鍍棚にびつしり春一番
* 春炬燵目葉ぽいと投げくれし
いかのぼり空の奈落に引かれゆく

千の手

千田百里

大原女の籠の菜の揺れ百千鳥
啓蟄や夫は齒医者に行くと言ふ
酒やめようか詩を止めようか春の夢
* 吊革の千の手眠き暮春かな
飛驒遠くして春陰の合掌家
梅東風を聴く横笛庵に佇ち

雀躍

上谷昌憲

パン屑にまこと雀躍雀の子
地虫出てその場限りのお大事に
悪友も疎くなりたる蒸蝶
* 無位無冠無欲清貧梅ひらく
辛夷咲く人の気配の無き夕べ
礼状の数行削除鳥ぐもり

栞紐

辻美奈子

* 花束に入るる枝もの春浅し
春愁につく銀色の栞紐
少年は身を折りて泣く雨水かな
春光やいづくに向かふとも未来
木の芽雨子の不機嫌を包みわり
鈍色の空にあかがね涅槃西風

立ち上がる

細川洋子

* 畑焼の草木いつたん立ち上がる
ぶつきらぼうな少年セロリ噛む
いつせいに木蓮蜂起せるあした
虹彩のしんしん冷ゆる初ざくら
嵩うすき乳房押ふる春愁
耳遠き母との会話日永し

春疾風

甲州千草

*後悔をざつくりと切る春キャベツ
重すぎる固定装具や抱卵期
春疾風籠の青菜の飛びたがる
風に問ふ日に問ふ歩幅燕来る
春疾風蛇口の弁を換へてをり
追ひ焚きの昼の湯の音木の芽時

定位置に

林昭太郎

*紅梅の空混み合つてきたりけり
退院を見送る白衣風光る
三月来サラダボールに朝を盛り
臙の夜針を下ろせば楽の湧き
横書きの手紙に「かしこ」三鬼の忌
臙夜の包丁のみな定位置に

黒土ふはと

柴崎英子

春寒し雑木林の径とぎれ
生も死もこの世のならひ辛夷咲く
生き方のいまだ不器用残り鴨
川幅を広げかがやく春の川
*雨あとの黒土ふはと弥生かな
春風の竹林胎動はじめけり

靴の紐

能美昌二郎

浅春や鉄鎖の軋む貯水場
自転車のおしろ佐保姫乗せて来る
踏青や足裏に心地よき起伏
*接写する霜の世界の小宇宙
臘梅や花散らしゆく鳥の影
啓蟄やきつく結びし靴の紐

潮鳴集



鬼の洗濯岩

磯貝尚孝

鳥帰る

七種年男

* 佐保姫と南の国に待ち合はす
春めきて日向の空の明るさよ
東征の神話のありて涅槃西風
はるかぜに鬼の洗濯岩かわく
日南の海うららかにモアイ像

銀嶺に影のさざ波鳥帰る
川の水押し競饅頭して温む
残雪の比良の稜線明るうす
* 鳥帰るひと粒のこる正露丸
役者絵の顎の曲線うららなり

菜の花忌

大沢美智子

吾の影

菊地光子

涅槃西風跳の一遍駆け出すか
飛ぶやうに過ぐる七曜亀鳴けり
春風や網を繕ひ沖を見ず
菜の花忌タンカーの行く沖の藍
* 海原のながき残照鹿尾菜干す

* 啓蟄や地を這ふものに吾の影も
地を撫づる庭師のシャベル風光る
しづしづと弥生の空へ観覧車
老梅の一枝一枝に強き意志
寄せて引く波の律儀や鳥帰る

春 隣

篠藤千佳子

だんだんと氷柱になつてゆく氷柱
 出遅れて足跡あまた雪の原
 *セーターに顔の出でくる日曜日
 間取り図を見比べてゐる春隣
 立春や戸毎に届く検針票

オパール世代

内山花葉

群れゐてもさより一匹づつ光る
 登四郎兜太往ぬなり春潮鳴りやまず
 遭難碑しづく辺りよ岩海苔掻く
 まんさくや金糸卵の散るうどん
 *オパール世代活動的な高齢世代と囃され目刺頭より

追 鯉

平松うさぎ

二月尽砂地に動く魚の目
 鈴の音は神の依代水温む
 川を解く和船の櫂のうらけし
 さざ波もせせらぎも歌春闌くる
 *追鯉して春愁を断ち切りぬ

中二階

埴誠一郎

*春昼や学食いまま中二階
 この辺り大奥の跡鳥帰る
 貫ひ来し納税証明目刺食ぶ
 千変の地層重ねて春動く
 春光を掬ひて戻るブーメラン

蓬 餅

木村美翠

方言に生くる強さや蓬餅
 *春浅し証明写真の丸き椅子
 灯台の門扉引き戸や春怒濤
 お涅槃や雨に取り込む植木鉢
 一対といふ明るさや雛飾る

水温む

兵 藤 恵

*水温むみんな番になりたがる
 初蝶を太陽系へ加へたし
 少しづつ吹けて鶯笛らしく
 駅弁の仕切りのどかに半回転
 ケーキのフィルムくるつと外し花曇

飛鷹選評



能村 研三

来し方は折線グラフ 水温む 中西 恒弘

人間社会に生きる私たちは、どんな人でも多かれ少なかれ波乱万丈の人生を送っている。右肩上りを続ける人もどこかで何らかの挫折を経験しながら、再起しては新たな人生を歩み続ける。だからこそマイナスに傾いた時、それを撥ね返す力となるのだ。「水温む」季節、作者自身の「気持ちの水」が「温む」ことで「春」を感じたのだろうか。これまでの半生を振り返ってみると、まさに折線グラフのようであった。

みどり子の眉根にちから春の山 大久保志遠

生まれたばかりのみどり子であろう。春の山が季語として使われているので、男の子も女の子も想像ができ、力づよい。生まれただけでも、しっかりと眉毛が濃く凛々しく見える子もいる。あどけなさの中にも未来に向いた意志の強い顔立ちのみどり子であった。

水菜盛るひと掴みまたひとつまみ 稗田 寿明

水菜は京都近郊で古くから栽培されていた野菜で、清冽な湧水を注いで栽培することからこの名がついた。ちなみに関東ではこれを京菜と呼んでいる。サラダや和え物などにしたのであるのか。冷水につけてシャキシャキとさせたものをひと掴み、そしてまたひとつまみと皿に盛りつけた。「ひと掴み」「ひとつまみ」の動きの変化を巧みに捉えている。

野水仙海は大きな日向かな 岡本 秀子

いつもの散歩道には、野水仙が誰に見られることなく元気に咲いていた。野水仙というと福井県の越前岬などが有名だが、寒さの中を咲いている花は可憐であり、品が良く良い香りがして、海の明るさから大きな日向にいるような思いであった。この風景であると、きつと湘南か房総の海であろう。

旧かなの母校の校歌水温む 川高郷之助

校歌が文語体で旧かなを使つたものだとすれば、戦前に出来た学校で、多くの先輩諸氏より唄い継がれてきたのである。最近の口語体の校歌よりも格調があつてすばらしい。作者は学校を卒業して幾年もたったが、水温む春は卒業の頃が思い出されいつの間にか校歌を口ずさんでいた。

燃ゆるもの初めは固し牡丹の芽 下村たつる

牡丹は三月末頃、麗らかな日が少し続くと枯木に燃えるような炎のような芽を吹く。枝先の燃えるような赤い芽には力強さを感じる。その中には、やがて大きな花を咲かせる未来が詰まっているのだろう。

沖作品



能村研三選

* 来し方は折線グラフ水温む

市川

中西 恒弘

春疾風欠航告ぐる手書き文字

追伸に自愛の一語涅槃西風

誉められし一言胸に卒業す

うりずんや泥に漬け染む島紬

積む雪の繋りゆく音夜もすがら

しののめの桜隠しとなる城下

* みどり子の眉根にちから春の山

桜鯛汁と鱈に鬼平忌

こでまりの路地に声湧く嫁ひろめ

けものらの足あとを追ふ探梅行

寒明や宛名未定の引継書

* 水菜盛るひと掴みまたひとつまみ

ポップコーン爆ぜるはげるよ梅の花

へたくそでいいいな字のがみ春

千葉

稗田 寿明

愛知

大久保志遼

藁結び媪束ねる水菜かな

大寒や矮鶏の卵黄盛り上がる

曇天や音の割れみて寒怒濤

遊動円木乗つてみたしや涅槃西風

* 野水仙海は大きな日向かな

* 旧かなの母校の校歌水温む

指に挟めば白魚に確と芯

陽炎を振り切るやうに離陸せり

かばかりの落差に春の水の音

堰越ゆる水の太さや雪解川

パエリアの烏賊の中空春臙

パレンタインデー仮想通貨の囃されて

* 燃ゆるもの初めは固し牡丹の芽

人にある自然治癒力下萌ゆる

エンドロールの長き合作臙の夜

千葉

下村たつゑ

埼玉

川高郷之助

岡本 秀子